

地方へのスポーツの伝播とそのパターンに関する研究

——宮城県の事例研究——

丸 山 富 雄

はじめに

わが国の場合、明治以降の近代スポーツの移入やその伝播は、一般に学校や軍を中心に、外発的、そして中央から地方へと上意下達式に浸透・普及していった。例えば、大日本体育協会や大部分の競技団体の設立の経緯とその地方支部結成の働きかけはその典型的な例であろうし、また明治19年に東京帝国大学に初めて結成された「運動会」等の校友会、体育会の設立過程をみても、中央から地方へ、上級学校から下級学校へと普及している。スポーツの伝播やその変容に関しては、外来文化としてスポーツを捉え、移入された社会が受けるその影響や、逆にその社会に適用しうるようにスポーツが変容される研究等が一般的である。例えばエスキモーやインディアン社会等の未開社会へのその浸透と受容過程の研究はかなり行われており、また「中央史」としてのわが国の明治初期のスポーツ史研究も枚挙にいとまない。しかし「地方史」としてのスポーツの伝播や組織化の過程の研究は、各県のスポーツ史、特に体育協会史等で断片的に説明されるだけで体系的な研究はほとんどないといえる。そこで、本研究では戦前の宮城県を事例として、地方へのスポーツの伝播・普及の形態を明らかにし、そこに一般化しうるパターンや特徴を考察しようとするものである。

ところで、ロイら⁶⁾の指摘するように、社会制度としてスポーツを研究する場合、スポー

ツにかかわる人々の活動を調整し促進するスポーツ組織の考察はその中心的な課題の1つである。そこで宮城県へのスポーツの伝播の形態を考察する本研究においても、スポーツ組織をその中心に措定することにする。組織とは、一般に機能集団が分業関係と制度化された支配関係を備えたものと定義され、そこに目的-手段の体系および地位役割関係が構造化されていることが必要要件とされる²⁴⁾。しかし、スポーツ組織という場合、一般的には上述の要件の他に、影山ら²³⁾の指摘するように、小集団の統合体あるいは統括団体であるという性格、および集団機能の特殊性（スポーツ活動それ自体よりもスポーツのための計画、運営、調整）という特徴を挙げることができる。本研究においても、スポーツ組織のこのメルクマールに準拠し、成立時期の宮城県のスポーツ組織の形成過程を分析する。

1. 戦前の宮城県内のスポーツ状況

最初に戦前の宮城県内のスポーツについて簡単に概略する。戦前の宮城県内の体育・スポーツ団体の設立時期やその主要大会は巻末年表^{註1)}のとおりであるが、大きく3つの時期に分けることができる。すなわち、明治20年代から大正の中期までの学校運動部を中心とした第1期、大正中期から太平洋戦争勃発まで、すなわち1920、30年代の戦前にスポーツが最も隆盛した第2期、およびその後終戦までの第3期であ

る。ここでは県内スポーツ諸団体の設立期を中心に扱うことから、第1期および第2期の県内スポーツの状況をその背景とともに概観することにする。なお、戦前のわが国スポーツ界のこのような分け方に関しては、全国規模の主要大会や中央のスポーツ諸団体の設立時期などから、中央ならびにどの地方においてもほぼ同様と思われる。

1) 第1期

明治以降、わが国のスポーツは主に学校をその土壌として発展・普及していった。前述の東京帝国大学運動会をはじめ、全国の学校では開学後数年のうちに、学生・生徒の課外活動全体を統括する校友会、学友会が設置された。宮城県でも明治20年、第二高等中学校として設置された第二高等学校（旧制二高）は、高等学校への改称前年の明治26年「尚志会」を発足させた。また明治30年には宮城県第一中学校（旧制一中、当時は宮城県尋常中学校）が「学友会」を、同33年にはそれまでの組織を統合して宮城師範学校に「右尚会」が設立されている。

これらの学校の運動部の設立時期を迎えることによって、そのスポーツの導入や学校における普及・発展の様子を伺い知ることができる。年表のように、大正中期までに宮城県に導入され普及したスポーツは、主に柔道、撃剣（剣道）、弓道の武道と、野球、庭球、漕艇の6種目であったといえる。これらのスポーツは、当初、尚志会端艇大会（明治29年4月第1回大会）に典型的にみられるように、学内対抗の形式で競技されたり、相手校に挑戦状を送って遠征する対抗試合（例えば、明治31年4月、一高対二高の野球および柔道の対抗試合）の形式で行われていた。その後、県内の学校間での定期戦（宮城県では明治33年5月の旧制一・二中による野球試合が定期戦の初めとされている）や県内外の上級学校主催の大会に参加するようになる。中でも、県内あるいは東北地方のスポーツの中心であった二高は、明治38年の河北新報社提供優

勝旗争奪野球試合や明治44年の第1回東北六県中等学校野球大会等、早くから様々な種目の競技会を主催し、統括団体のなかったこの時期、スポーツの普及と発展に大いに寄与している。

2) 第2期

わが国のスポーツが、戦前、飛躍的な発展を遂げたのは大正の中頃からであるが、それは前述の学生スポーツの発展と、オリンピックや極東選手権競技大会への参加および明治神宮競技大会等の全国規模の大会の開催とそれらの地方予選の開催、さらにはスポーツによって国民の体力増強と思想善導を図ろうとしたスポーツ政策によるといえる。

競技会に関しては、大正6年5月に東京で開かれた、わが国初の国際大会である第3回極東選手権競技大会をあげることができ、この時からわが国は本格的に国際競技に参加することになる。それによって国民のスポーツに対する関心は高まったが、地方においては大正9年（1920年）の第7回オリンピック大会の地方予選会からであろう。宮城県では全国10会場で開催されたこの第1次予選会を、地方の有力団体ということで東北帝国大学が主催している。その後さらに、極東選手権競技大会や明治神宮競技大会の地方予選が開かれることになり、県内では大正末まで毎年のように陸上競技の予選会が開かれていた。

政府の体育運動政策では、第1次世界大戦後のこの時期、教育全般にわたって道徳教育の強化、国体観念の育成が叫ばれ、大正6年「臨時教育会議」が設置されるが、この方針に沿って体育やスポーツは大いに奨励された。その後、大正15年の文部省訓令「体育運動ノ振興ニ関スル件」をはじめ、学校体操教授要目の改正、また昭和3年の文部省行政機構の改編・整備、「体育運動審議会」（昭和4年）、「地方体育運動職員制」（昭和5年）の制定などを通し、体育・スポーツの行政指導は強化されていった。宮城県においても、大正15年、学務部が新設され、

昭和2年には学務部教育課内に、「体育指導奨励、体育連盟、体育団体」の事務を扱う体育主事のポストが設けられ、宮城師範学校教諭の佐藤義江が任命された。さらに「地方体育運動職員制」に対応して、佐藤は昭和5年12月にその事務嘱託、6年7月に初代の宮城県体育運動主事に就任している。

ちなみに佐藤義江は、東京高等師範学校時代、第3回極東選手権競技大会の五種競技に出場するなど（根本姓で出場）、陸上競技で大いに活躍した選手であるが、大正9年宮城師範学校に赴任し、教鞭をとる傍ら、大正12年1月、宮城体育研究会を設立し、各種の体育講習会や競技会を主催し、体育・スポーツの普及啓蒙に努めている。また、東北学生陸上競技連盟や宮城県中等学校体育連盟、宮城県体育協会、宮城県スケート協会等、数多くの体育・スポーツ団体の創設とその育成に尽力した。佐藤は昭和14年8月、現職のまま病死するが、偶然ではあるが、彼の宮城県への赴任からの在住20年間は、戦前の宮城県で最もスポーツがさかんであった1920年代、30年代のこの時期であった。戦前の宮城県体育・スポーツ界において、指導者として、また行政官として多くの功績を残した佐藤義江については、別の機会に論じたいと思う。

宮城県では、この時期、第1期の6競技に加え、陸上競技、水泳、スケート、卓球、サッカー、ラグビー、硬式テニス、バスケットボール、スキーなどの種目が大いに普及し、それらの競技会がさかんに開催されている。学校主催大会は、前期には旧制二高だけであったが、この時期になると東北帝国大学の全国高専校大会や東北学院専門部による北日本中等学校大会、さらには女学校や小学校までもが各種大会を開催している。また、県内各種スポーツ団体の設立はいずれもこの時期であり、それら団体主催の大会も持たれるようになった。さらに、中央組織への加盟等によって、全国大会の予選やいくつかの全国大会も開催されている。

2. 地方におけるスポーツ組織の形成過程

日下^{4) 5)}は、わが国にスポーツが移入、紹介されてから、全国的、総合的な組織体が形成されるまでの過程を、以下の6つの段階に分け検証している。すなわち、

1. インフォーマルな遊戯集団が発生し始める時期
2. インフォーマルなチームが出現し、個別的な試合を行い始める時期
3. 校友会組織としてフォーマルな運動部が設置され始める時期
4. 試合のための連合組織が形成され始め、それによってスポーツ集団が増加する時期
5. 各種目別の競技団体が設立され始め、全国的な組織が形成される時期
6. わが国における全国的、総合的なスポーツ組織が形成される時期

である。

しかし、地方でのスポーツの組織化過程はその一般的過程がそのまま適用されるとは限らない。中央と地方という対比で考えれば、典型的には、地方の組織化がそのまま中央の組織化に貢献するような場合、あるいは最近の国体時にも時々報告されるように、その地域に全く普及していないスポーツ種目の場合、先に外圧的に県協会ができ、上からの指導・普及というパターンもある。

この典型的な2つのパターンの中に、様々なバリエーションも考えられるが、どの様な種目が何故、いかなる条件でそうなったかを、宮城県を事例に考察する。

表1は、武道を除き戦前の宮城県で行われていた主要13種目について、①宮城県での実質的なフォーマル・クラブの出現、②県内での対抗戦あるいは定期戦、③初期の頃の代表的なトーナメントあるいはリーグ戦形式の競技会、④県内統括団体の結成、およびその種目の全国的な

表1 宮城県におけるスポーツの普及と組織化過程

パターン	種目	フォーマルクラブ	対抗戦 定期戦	競技会	県内 統括団体	全国 統括団体
I	野 球	M. 27二高	M. 33. 5 一中対二中	M. 38. 12 優勝 旗争奪野球試合	(T. 9 仙台少 年野球協会)	(T. 9 大日本) 少年野球協会)
	軟式庭球	M. 27二高	M. 35. 10 二高対医専	T. 2. 11 東北六 県中学庭球大会	T. 13 仙台軟式協会	T. 13 日本軟球協会
	漕 艇	M. 28二高	M. 36. 10 一中対東北中学	T. 3. 4 松島公 園創始競漕大会	S. 6 日本漕 艇協会東北支部	T. 9 日本漕艇協会
II	スケート	T. 1 二高		T. 11. 1 二高 スケート大会	T. 12 仙台スケート協会	S. 4 大日本 スケート競技連盟
	卓 球	T. 9 芭蕉クラブ		T. 10 秋 県下団体選手権	T. 10 仙台卓球協会	S. 6 日本卓球会
III	陸 上	T. 8 学院専門部		T. 9. 4 第7回 オリンピック東北予選	(T. 12 東北学生) 陸上競技連盟)	T. 14 日本陸上競技連盟
	水 泳	T. 13 二高		T. 13. 9 市内 中学水上大会	S. 5 宮城水泳協会	T. 13 大日本 水上競技連盟
	ス キ ー	T. 13 鳴子体育協会		T. 15. 2 東北 少年スキー大会	S. 8 宮城県スキー協会	T. 14 大日本スキー連盟
	バスケット	S. 2 二高, 東北大学		S. 3. 10 三校リーグ戦	S. 8 宮城県籠球連盟	S. 5 大日本 バスケットボール 協会
IV	サッカー	T. 13 二高	T. 13. 7 一中対二中	T. 15. 6 東北蹴球大会	T. 15 大日本 蹴球協会東北支部	T. 10 大日本蹴球協会
	テ ニ ス	T. 13 二高硬式採用		T. 13. 11 東北硬式庭球単試合	S. 7 東北庭球協会	T. 11 日本庭球協会
	ラグビー	S. 2 学院専門部		S. 5. 11 東北 高専校七人制大会		T. 15 日本 ラグビー蹴球協会
V	ヨ ッ ト	S. 13 東北大学			S. 13 東北ヨット協会	S. 7 大日本ヨット協会

統括団体の設立期を示したものである。また、図1は②の「対抗戦あるいは定期戦」を除き、上述のものを時間軸に表したものである。

これをみると、県内統括団体の結成されなかった種目もあるが、宮城県のスポーツの普及、組織化の過程と中央の統括団体との関係には以下の5つのパターンがあることがわかる。

パターン I : フォーマル・クラブ—競技会—
県統括団体, 中央統括団体

この類型には野球, 軟式庭球, 漕艇の3種目が入る。それらの種目の宮城県への導入は非常に古く、またこのパターンだけが県内でも上述①から④の過程を時系列的に経て普及、組織化されている。クラブ, 競技会などの出現も、中央に比較すれば当然時期的に遅れてはいるが、そのずれもそれほど大きくなく、漕艇を除き県



図1 宮城県におけるスポーツの普及状況

内の統括団体と中央団体の設立もほぼ同時期にある。したがって、このパターンを「中央・地

方同時普及型スポーツ」と呼ぶことにする。

パターンⅡ：フォーマル・クラブ—競技会—
県統括団体—中央統括団体

宮城県ではスケートと卓球がこの類型に入る。スケートはパターンⅠとほぼ同様の普及、組織化の過程を辿るが、後にみるように卓球は県内導入は比較的早いものの、実質的な活動は大正10年頃からに集中している。いずれにしてもこのパターンの大きな特徴は、地方すなわち県内の統括団体の結成が中央に先んじていることである。「地方団体先行型スポーツ」とする。

パターンⅢ：フォーマル・クラブ、競技会、
中央統括団体—県統括団体

文化の地方伝播に一般的にみられるように、今回設定したいずれの基準においても地方が中央を追うように普及していく場合である。陸上のように例外もあるが、県内のフォーマル・クラブの設立や競技会と中央統括団体の結成がほぼ同時期にあり、その後県内統括団体が設立されるようなパターンである。「中央団体先行型スポーツ」とする。

パターンⅣ：中央統括団体—フォーマル・ク
ラブ—競技会—県統括団体

その種目の中央での普及・発展が早く、時期的に中央統括団体が設立されてから地方に伝播され普及していく場合である。戦前の宮城県ではサッカー、テニス、ラグビーがここに入る。「地方後進型スポーツ」とする。

パターンⅤ：中央統括団体—県統括団体—フ
ォーマル・クラブ—競技会

地方には全く普及しておらず、フォーマル・クラブや競技会に先んじて県内団体ができ、その主導で普及する場合である。前述のように現在でもその種目の未普及地方で時々見聞するが、戦前の宮城県ではこれとほぼ同様のパターンの種目にヨットがあげられる。「地方未普及型スポーツ」とする。

総じてパターンⅠからⅤになるにしたがい、宮城県へのその種目の導入やフォーマル・ク

ラブの結成の時期は新しく、明治時代に県内に移入された古い種目はほとんどパターンⅠまたはⅡに入る。蹴球に関しては、二高尚志会発会式会則の武芸部規約の中に「フートボール」の名称もあり、また明治30年11月に一中に蹴球部ができ、以後毎年春秋に十数組が参加する校内大会を催しているが、対抗試合等の実質的、正規な活動は大正10年頃からである。また、陸上競技と水泳に関しても、前者は運動会として、後者は古式泳法が、いずれも古くから行われているが、今日のような形式になったのはやはり大正の後期からである。

文化の伝播の一般的なパターンを考えた場合、地方が中央と同歩調をとったり、それに先行する場合がより考察に値するであろう。そこで以下、パターンⅠおよびⅡについて、どのような種目が何故、いかなる条件でそうなったか、さらに同じパターンにもどのような違いがあるのかについて考察しよう。

パターンⅢとⅣについては、スポーツに限らず様々な文化伝播における時間的なずれの現象である。ここではその詳細は省略するが、その種目の中央統括団体結成の時期の違いがこの2つの類型を生じせしめたといえる。宮城県におけるパターンⅢの4種目はいずれもオリンピックや極東大会を期に大日本体育協会がその全国大会を開催し、各競技団体の設立は大日本体育協会が組織改造を行った大正13年以降になっている。一方、パターンⅣの種目の中央統括団体は大日本体育協会とは密接な関係を持たずに、独自に統括団体の結成を図ったためといえる。したがって、パターンⅢの種目の大日本体育協会主催の第1回大会時を、ある程度その種目の普及と組織化がみられた時とすれば、この4種目の宮城県での普及、発展のパターンもパターンⅣと考えるのもよいであろう。

3. 中央・地方同時普及型スポーツの特徴

パターンⅠにはいる、野球、軟式庭球、漕

艇について、宮城県でのその普及、組織化の過程をみることにする。

〔野球〕野球の県内への導入は極めて早い。一般に、スポーツ好きの外人教師や留学生からわが国の外来スポーツが紹介され、普及していったように、宮城県でも野球は、明治21年9月、アメリカ人教師ハーレスの二高（当時は第二高等中学校）赴任によってもたらされたとされる。その後、前述のように、明治26年、二高の「尚志会」設立と同時に野球部（当時はベースボール部と称される）が誕生している。しかし、最初は武芸部の野球好きの集まりといえ、独立した部としては翌年、ローンテニス部とともに選手制度が確立してからである。他の学校でも同様に、野球部は学友会の設立と共に設けられ、学生への野球の普及と彼らの野球熱の高さが窺える。同年5月、二高と東北学院との試合の記録もあるが、公的な対抗試合は明治31年4月の二高対一高の試合である。

県内の試合をみると、明治33年5月から始まる、一中対二中の定期戦が最も早い。また、学校主催の大会では、二高が明治38年12月に主催した河北新報社提供の優勝旗争奪試合や44年10月開催の東北中等学校野球大会がある。

大正に入ると、野球は社会人や実業団、また小学生にまで数多くのチームが生まれ、普及、発展していく。なかでも、中学校で活躍した選手で構成された「アマチュア・クラブ」は当時相当の実力があり、大正9年10月には、わが国に遠征中のシアトル・ミカド軍と県内初の有料試合を行い、3対3の引き分けに終わったという記録もある。この頃の社会人の大会には、大正9年からの仙台日日新聞主催の仙台実業野球大会、大正10年からの塩釜実行クラブ主催の東北実業野球大会などがある。また、大正9年には大日本少年野球協会からの求めに応じて仙台少年野球協会（代表半沢正二郎）を結成し、宮城県大会や東北大会を開催している。

野球の場合、現在も軟式野球連盟の他は学生

や社会人を共に統括する団体はない。しかし、学生野球では、二高が前述の大会の他にも、例えば朝日新聞主催の全国中等学校優勝野球大会の第2回東北予選（大正5年）から第7回大会までを後援するなどのスポンサーシップをもったり、自ら、大正7、8年、京都帝国大学主催全国直轄学校野球試合での優勝（大正8年は決勝戦中止）、昭和10年の第1回全国高校野球連盟大会での優勝、さらに昭和15年第6回全国高等学校野球大会の開催など、中央の発展とともに歩んできたといえる。また、社会人野球でも、仙台鉄道局が昭和2年の第1回都市対抗大会から昭和17年の16回大会まで12回も東北代表として全国大会に出場したり、大正10年からの全国鉄道野球大会では、戦前優勝2回、準優勝4回という輝かしい成績を挙げている。

このように、野球を統括する県内団体は詳細の不明な仙台少年野球協会以外なかったといえるが、それは野球のわが国における普及、発展の特徴でもある。全国組織が存在せず、その組織化に対する宮城県の貢献といったものは不明であるが、宮城県の野球の歴史、普及程度、またその実力といったものは全国レベルにあったといえ、常に中央を指向し、中央の普及・発展と軌を一にして普及していったといえる。

〔軟式庭球〕軟式庭球も野球同様、明治末期から学校を中心に全国的に普及したスポーツであるが、宮城県においても二高という中心的存在から、県あるいは東北を中心に当初から非常に発展したスポーツである。

宮城県での軟式庭球のフォーマルなクラブの出現は、野球同様、二高の明治27年が最初である。その後、明治30年代には一中をはじめ、宮城師範学校や仙台医学専門学校等多くの学校に庭球部が設立された。二高は明治35年10月、医専との県内初の対抗試合を行っている。さらに明治38年、二高は県下庭球試合や市内連合大会を開催しているが、このことはその頃の二高の対戦相手不足と宮城県や仙台市での庭球の普及

をともに意味しているといえよう。その前後、明治37年に東京高等師範学校、39年には早稲田大学のテニス選手が来仙し、ともに講習会や連合試合が催されているが、本格的な競技会は大正2年11月、二高が主催した東北六県中等学校庭球大会が最初で、16校が参加したという。

中央でも、わが国最初の対抗戦は明治31年の東京高師対東京高商とされ、また最初の連合大会も明治35年東京高師主催のものであるとされる。このように本県に庭球が導入された初期の頃、東京の有力校の援助もあるが、中央との時期的な差はほとんどなく、急激に普及したといえる。その後、大正期には二高をはじめ県内各学校および仙台鉄道局等の主催する大会、また官公庁リーグも開催されるなど発展を示した。

文献¹²⁾によれば、大正13年、東京に日本軟球協会が設立されるや、在仙クラブ、官公庁クラブを中心に宮城県軟球協会が設立されたという報告がある。しかし、試合結果の中央への報告¹⁷⁾をみれば、仙台軟球協会が正しいようである。一方、中央協会はその後明治神宮体育大会のルールに絡んで分裂し、それが一応統一されたのは昭和3年日本軟球連盟の創設によってである。しかしその後も内紛が続き、結局全国を統一できたのは、昭和8年4月の日本軟式庭球連盟の結成によってであった。その後昭和10年、日本庭球連盟と改称するとともに、それまでのブロック制を廃し、府県単位の組織にした。仙台軟球協会結成以降の詳細は定かではないが、昭和10年、中央の組織改造に対応して日本庭球連盟宮城県支部とし、その時の全国評議員の参加者として福村重蔵の名がみられる(17:467頁)。

以上、軟式庭球の宮城県での普及、発展の様子を、中央の組織化の様子と比較しながら概観してきたが、例えば二高が全国大会に遠征することもなく、野球とは違い、軟式庭球の場合は宮城県あるいは東北地方内で独自に発展していったといえよう。

野球と軟式庭球は、宮城県の場合、二高、東

北大学という旧制高校、帝国大学があったため、その普及や発展がいち早くまた非常に活発であったといえるが、この2種目は明治中期からいづれの地方においても普及した種目であり、この伝播のパターンはある程度どの地方においても共通したものといえよう。

[漕艇] 漕艇の本県導入は定かではないが、明治28年3月、二高に水上運動部が設立してから本格的に行われるようになった。同年12月には初の対部レースも行われている。翌29年、30年と、二高は四高との対抗試合について挑戦状のやり取りがあったが、双方都合がつかず不成立となっている。その間、二高では29年から毎年一回恒例の競漕大会が開かれ、大変な賑わいをみせたという。その後、明治35年9月、二高水上運動部は端艇部と名称を改め、36年には一中にも端艇部が設立されている。県内での対抗試合は二高の競漕大会の中での来賓競漕としての中等学校のレースが最初である。明治36年頃からの一中対東北中学の対戦はその後も続く宿敵同志ということで大変な人気を呼んだといわれている。競技会としては、大正3年4月、松島、塩釜の開発・宣伝を兼ね、宮城県が主催した松島公園創始競漕大会が東北でも最も早いものである。早稲田、慶応のクルーをはじめ、東北、関東から相当数の参加があったという。また、今日にも継続する「石巻川開き」競漕大会も大正5年8月から始まっている。

昭和6年に至り、日本漕艇協会東北支部が正式に発足するが、日本協会はそれ以前の大正9年6月、国際大会を目指した滑席艇採用の7校によって組織された。宮城県あるいは東北の各学校では明治以来の固定席艇を採用しており、特に二高や東北中学の力は全国でも屈指のものであった^{注2)}。その後、日本協会は、大正13年の明治神宮競技大会を期に固定席艇を採用する団体をも組織化する動きがみられ、昭和3年、組織改造と加盟強化を図り、実質的にはこの時に全国を統一したと考えられる。宮城県では、東

北帝国大学や二高が加盟し、東北支部結成に動いた。この年、支部結成には至らなかったが、中等学校の固定席艇全日本選手権の東北地区予選（昭和3年8月）を開催し、実質的な支部活動を起こしている。その後、昭和6年8月、関東、関西、北海道について東北支部が正式に承認され、支部長宮城音五郎（東北帝国大学教授）は本部副会長に就任、翌年、全国大会を開催している。

野球や軟式庭球とは違い、漕艇の場合、県内団体（東北支部）の結成は中央団体に遅れ、パターンIには適合しないが、中央の全国統一と宮城県での支部の実質的な活動が共に昭和3年とすればこのパターンの中に入れてもよさそうである。それ以上に、漕艇の宮城県での歴史やその固定席艇での実力を考慮すれば、野球同様、全国の普及・発展と共に、あるいはそれをリードしてきたともいえる。その要因は有力な学校と松島湾という地理的条件に恵まれたためであり、宮城県独自の特徴といえよう。

以上、地方スポーツの普及や組織化のこのパターンの種目は、その地域において種目導入の歴史が古く、普及度も高く、また全国的レベルの力のある種目といえる。したがって、中央とのギャップは少なく、全国組織の結成とほとんど同時に、地方協会も結成されることになる。

4. 地方団体先行型スポーツ

このパターンにはスケートと卓球が入る。以下、前記と同様、宮城県でのその普及、発展の様子をみることにする。

[スケート] わが国にスケートが紹介されたのが明治10年、札幌農学校であったとされるが、仙台でも明治23年頃には外国人宣教師が市内の堀で滑っていたという記録がある。その後、明治38年頃には、市内五色沼や与平沼で外国人宣教師や二高生、中学生が、真田紐で靴に縛り付

けた「仙台式下駄スケート」で滑るようになる。同じ頃、諏訪湖ではスピード・スケートを中心に、関東や東海、関西から多くの人が集まって活況を呈し、スケートのわが国の中心的存在となった。一方、仙台では、当時の二高生、田代三郎、佐藤幸三、河久保子朗らが、フィギュア・スケートを研究、実践し、わが国のフィギュア・スケートの中心となっていた。少し遅れて二高に入学した五代正友とともに、前記の人々は、大正9年1月、わが国最初の全国スケート団体である日本スケート会を創設する。

二高のスケート部は前述の人々の活躍もあり、大正1年9月に正式に設立されるが、明治37年の札幌農学校や明治39年創立とされる諏訪中学と並ぶ学生スケート団体の草分けである。大正11年1月、二高は日本最初のフィギュア・コンテストである第1回スケート大会を開催している。この大会には、東京から前記田代、五代らの二高OBが参加し、模範演技をしている。大正12年、佐藤幸三を中心に仙台スケート協会が設立され、二高の第3回大会は協会との共催で、大正13年1月、観衆千余名を集め五色沼で華々しく開催されたという。仙台スケート協会は医師や有名人を中心に、維持会員、普通会员、学生会員と組織を確立し、大正14年2月、東北大、二高とともに、東北スケート選手権大会、昭和3年1月には、日本スケート会主催の第1回全日本選手権フィギュア・アイスホッケー競技会を、また昭和6年1月には、大日本スケート競技連盟主催の第2回全日本氷上選手権フィギュア競技を誘致、開催している。

一方、中央団体は、大正9年、前述の日本スケート会がフィギュアを中心に結成され、その後各地のスケート愛好家を会員に加え全国的統制を企てたが、「封建的、個人主義的、排他的であり、一部スケート愛好家の親睦団体として存在していた」（2：1323頁）。その後、大正13年には全国学生氷上競技連盟、昭和2年大日本氷上競技連盟が結成されるが、日本スケート会が組織した大日本スケート連盟との確執が続

き、各々が全国大会を開催するなど混迷した。その2団体が歩み寄り、名実ともに全国統制団体となったのは、昭和4年11月、大日本スケート競技連盟が結成されてからである。

このように、宮城県のスケートの歴史はわが国のスケート、特にフィギュアの発達史そのものといえ、初期の中央団体の結成に貢献し、また中央団体が紛糾する間も、県内では着実に発展している。前述のように、中央団体の設立後すぐの全国大会を誘致するなど、常に中央をリードする形で発展している。河久保（日本フィギュアの開祖といわれる）をはじめとする先駆者を生んだことにもよるが、五色沼等の格好のリンクの存在も見逃せない。その意味で、スケートの場合、諏訪湖を中心とした長野県の場合も宮城県同様の普及パターンといえる。

[卓球] 宮城県では明治36年頃から、一中や師範学校、陸軍幼年学校で生徒や教師が卓球を行っていたとされるが、わが国でのその普及が明治35年、東京高等師範学校の坪井玄道が帰国とともにラケット等と持ち帰って以降ということであるから、宮城県では相当に古い歴史がある。本格的な導入は、大正7年9月、ドイツ語教授萩庭三寿の二高赴任からである。萩庭は旧制二高最後の校長であるが、若い頃は相当の奇行・蛮行の持ち主ともいわれ、また暇さえあれば卓球に打ち込んでいたという³⁾。彼はその後昭和12年、14年の第9回、10回の明治神宮体育大会壮年組で優勝するが、彼の赴任によって、卓球は急速に広まり、二高と宮城師範との対抗試合が師範の会議室や二高明善寮で度々行われるようになった。大正9年には、七十七銀行の芭蕉クラブをはじめとする実業団や中等学校にも卓球部が結成され、これを受けて、大正10年秋、萩庭を会長として仙台卓球協会が設立され、その年、第1回宮城県下団体選手権大会を挙行している。昭和2年、仙台卓球協会は宮城卓球協会と改称している。

当時の仙台卓球界は、大正14年7月、関東の

強豪校である東京歯科医専門学校との対抗試合で二高を中心とする全仙台チームがこれを撃破したのをはじめ、その後立大、農大、早大と全国屈指の大学が仙台に遠征し、一時仙台は全国卓球界のメッカの観を呈した。

卓球の中央団体は、仙台卓球協会と同じ大正10年10月、大日本卓球協会として設立されたが、これも前記スケート協会同様、様々な団体が分立、混乱が続き、全国を統一したのは昭和6年7月の日本卓球会になってからである。

宮城県での卓球の普及には前述の萩庭三寿の存在が大きい。彼の貢献により競技力も高まり、県内の組織化も早く行われた。しかし、スケートとは違い宮城県の卓球界が中央の組織化に貢献し、それをリードしたというわけでもなく、パターンⅠの軟式庭球同様、県内を中心に発展したものであった。

パターンⅡのスケートと卓球は、宮城県ではパターンⅠの種目の次に古く、明治の後半に県内に導入された種目であり、その県内統括団体の設立も非常に早い。宮城県の事例で明らかのように、地方団体先行型のスポーツは、分裂等で中央団体の組織力が弱体化しているのに対し、地方におけるその種目の歴史、普及度がかかなりある場合か、地理的条件等で地方が中央をリードするような場合が考えられる。このパターンの場合、日本漕艇協会もそうであるが、地方の活躍や発言力を無視できなくなり、中央統括団体の組織の改造や変動の一因になるともいえる。

ま と め

戦前の宮城県でのスポーツの普及やその組織化の過程を事例に、わが国の地方へのスポーツの普及パターンを考察した。その結果、中央統括団体の設立時期との関係で5つの類型を考察することができた。これら類型は、その種目の地方における歴史、指導者、普及度、競技力、また組織力などの観点から、中央と地方の相対的

力関係をみると、次のようにまとめることができよう。

類 型	中央	地方
パターンⅠ（中央・地方同時普及型）	強	強
パターンⅡ（地方団体先行型）	弱	強, 普
パターンⅢ（中央団体先行型）	強	普
パターンⅣ（地方後進型）	強, 普	弱
パターンⅤ（地方未普及型）	強	—

また、特にパターンⅠとⅡの場合、その要因には、地方の有力校の存在（宮城県の場合には旧制二高や東北帝国大学など）や地理的条件が大きく関与していることがわかった。さらにそれらスポーツの地方での普及も、常に中央を指向し、その発展と軌を一にしていたり、ある場合には中央の組織化に積極的に参与しそれをリードする場合や、その地方内だけで中央との関わりをあまり強く持たず、独自に発展するものがあるといえる。

本研究では、宮城県という一地方を事例に、単に地方へのスポーツの伝播と組織化の類型を考察したに過ぎない。これを一般化するには多くの他の地方の状況を考察する必要がある。また、今回は学生を中心としたいわばメジャーな部分の形式的な分析に留まり、スポーツの普及が人々の生活の中でいかに受容されていったかという内実の検討は行ってはいない。スポーツの「地方」への具体的展開に伴う教育、文化、生活面での変容を含め、今後の課題としたい。

注

注1) 本研究では、その性格上、考察の大部分が下記の参考文献からの引用であり、引用箇所のみ記すは煩雑なため大部分省略し、重要部分だけを記載した。なお、宮城県のスポーツ史に関する文献には試合等の開催期日に誤記も多く、筆者らが中心となって編集した『宮城県

体育協会史』13)において修正した。

注2) 二高の全国優勝を挙げると、大正11, 12年の東京帝国大学主催全国高校競漕大会、昭和5, 6年の京都帝国大学主催全国高専校固定席競漕大会、滑席艇に移ってからは東京・京都両帝国大学主催の全国高等学校競漕大会で昭和11年および昭和14, 15, 17年（16年は中止）の3連覇がある。また、東北中学も明治43年、大正2年の一高主催の全国中等学校端艇大会、大正13, 14年の明治神宮競技大会、さらに昭和6年全日本中等学校選手権競漕大会に優勝している。

主要参考文献

- 1) 第二高等学校史編集委員会編、第二高等学校史、第二高等学校尚志同窓会、昭和54年
- 2) 大日本体育協会編・発行、大日本体育協会史上、下巻、昭和11, 12年
- 3) 河北新報、大正14年2月3日付
- 4) 日下裕弘、わが国におけるスポーツ組織の形成過程に関する研究(Ⅰ)、仙台大学紀要17集29-43、昭和60年
- 5) 日下裕弘、わが国におけるスポーツ組織の形成過程に関する研究(Ⅱ)、仙台大学紀要20集1-17、昭和63年
- 6) Loy, J. W., B. D. McPherson & G. S. Kenyon, "Sport as a social phenomenon", In Sport and Social System, Addison-Wesley, 1978, pp. 3-26
- 7) 前田幸雄、仙台野球発展史、仙台野球発展史刊行会、昭和30年
- 8) 宮城県教育委員会編、宮城県教育百年史 第2, 4巻, ぎょうせい, 昭和52, 54年
- 9) 宮城県仙台第一高等学校編、仙台一高六十年史、宮城県仙台第一高等学校同窓会、昭和31年
- 10) 宮城県仙台第一高等学校編、年表「仙台一高の九十年」、宮城県仙台第一高等学校創立九十周年記念行事実行委員会、昭和57年
- 11) 宮城県史刊行会編・発行、宮城県史18(医業・体育編)、昭和34年
- 12) 宮城県体育協会編・発行、宮城県スポーツ十年史、昭和36年

- | | |
|--|---|
| <p>13) 宮城県体育協会編・発行, 宮城県体育協会史, 昭和64年</p> <p>14) 宮田勝善, ボート百年, 時事通信社, 昭和54年</p> <p>15) 長野県体育協会編・発行, 長野県体育協会史, 昭和63年</p> <p>16) 中山善雄, 江藤武人編, 天は東北山高く, 財界評論社, 昭和41年</p> <p>17) 日本軟式庭球連盟編, 日本庭球史, 遊戯社, 昭和60年</p> <p>18) 日本スケート史刊行会編・発行, 日本スケート史, 昭和50年</p> | <p>19) 日本スケート連盟編, 日本のスケート発達史, ベースボールマガジン社, 昭和56年</p> <p>20) 日本体育協会編・発行, 日本体育協会五十年史, 昭和38年</p> <p>21) 日本体育協会編・発行, 日本スポーツ百年, 昭和45年</p> <p>22) 日本体育協会編・発行, 日本体育協会七十五年史, 昭和61年</p> <p>23) 竹之下休蔵, 磯村英一, スポーツの社会学, 大修館, 昭和40年, 123頁</p> <p>24) 富永健一, 社会学原理, 岩波書店, 昭和61年, 228頁</p> |
|--|---|

A Study on the Patterns of the Sport Diffusion among the Local Community

—the case of Miyagi Prefecture—

Tomio MARUYAMA

The purpose of this paper is to clarify the generalized patterns of the sport diffusion and its organization process among the local community, on the case of prewar Miyagi Prefecture.

Following five patterns were found from the investigation. Those were,

1. the type of sports which were diffused among the central and the local community simultaneously, including Baseball, Soft-tennis and Rowing;
2. the type of sports whose local governing bodies were proceeding against the central ones, including Skating and Table-tennis;
3. the type of sports whose central governing bodies were proceeding against the local ones, including Track and field, Swimming, Ski and Basketball;
4. the type of sports which were not diffused much among the local community, including Soccer, Tennis and Rugby-football;
5. the type of sports which were not diffused at all among the local community, including Yacht.

戦前の宮城県スポーツ略年表

	全国主要大会等	宮 城 県		
		学校運動部	スポーツ団体等	県内主要大会
明治 26 28 29 30 32 33 35 36 38 41 42 44 45 大正 2 3 5 6		(二高尚志会) 柔道部, 撃剣部, ベースボール部, ローテニス部 (高) 水上運動部, 弓術部 (一中学友会) 撃剣部, 柔道部, 野球部, 庭球部, 蹴球部 (宮城師範右尚会) 撃剣部, 柔道部, 弓道部, ベースボール部, ローテニス部 (高) 水上運動部, 端艇部と改称 (中) 端艇部 (中) 水泳部, 徒歩部 (高) スケート部 (中) 角力部		二高第1回尚志会端艇大会 二高対一高第2回柔道・野球試合 第1回一中対二中野球定期戦 第1回二高対医専庭球定期戦 二高主催第1回優勝旗争奪野球試合 河北新報主催松島湾大競泳大会 二高主催第1回東北六県中学校野球大会 二高主催東北六県中学校庭球大会 松島公園創始競漕大会 二高後援第2回全国中等野球東北大会
第3回極東大会(芝浦)	「大日本体協」設立			
9 10 11 12 13 14 15 昭和 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15	第7回オリンピック大会 第6回極東大会(大阪) 第8回オリンピック大会 第1回明治神宮競技大会 「大日本体協」組織改造 第9回オリンピック大会 第9回極東大会(東京) 第10回オリンピック大会 第11回オリンピック大会	(高) 陸上競技部 (高) 山岳部 (高) 水泳部, 蹴球部 (高) 籠球部 (高) ラグビー部 (高) 卓球部 (中) 籠球部 (中) 排球部	仙台卓球協会 県講演館有段者会 仙台スケート協会 [東北学生陸連] 仙台軟式協会 大日本蹴球協会東北支部 [県中等学校体育連盟] 宮城水泳協会 日本漕艇協会東北支部 [県体協] 東北庭球協会 県スキー協会, 県籠球協会 東北ヨット協会 県弓道有段者会	東北大主催第7回オリンピック東北予選会 *大日本体協東北支部主催第5回極東大会仙台予選会 *仙台体協主催第6回極東大会仙台予選会 東北学生陸連主催第1回東北高専校, 中学陸上大会 仙台スケート協会主催東北スケート選手権大会 東北学生陸連主催第7回極東大会東北予選会 鳴子体協・河北新報共催第1回東北少年・素人スキー大会 日本スケート会主催第1回全日本スケート選手権大会 第2回全日本水上選手権フィギュア競技大会 宮城水協主催全日本水上競技選手権大会地方予選 第8回固定席艇全日本選手権 東北庭球協会主催第1回東北庭球選手権 北日本柔道東西対抗試合 第12回固定席艇全日本選手権 第2回東北六県・北海道樺太対抗柔道大会 第6回全国高等学校野球大会
		(高) 二高 (中) 一中		*両主催団体については、詳細は明らかでない。知事はその会長を務める等しているが、恐らくこれらの予選会のためだけの団体である。